

第 6 回経営顧問会議議事概要（案）

1. 日 時 平成 20 年 11 月 12 日（水） 13：40～17：00
2. 場 所 日本原子力研究開発機構 東海研究開発センター 原子力科学研究所
3. 出席者
（議長）有馬議長
（委員）内藤委員、野口委員、細川委員、毛利委員
（欠席：内永委員、勝俣委員、住田委員、立川委員、森寫委員）
（機構）岡崎理事長、中島理事、片山理事、石村理事、
岡田理事、横溝理事、三代理事
（欠席：早瀬副理事長、伊藤理事、中村監事、富田監事）
4. 議 題
 - (1) 開会挨拶
 - (2) 第 5 回議事概要(案)確認
 - (3) 第 5 回におけるご意見への対応について
 - (4) 概況説明
 - (5) ご視察（J-PARC、JRR-3）
 - (6) 機構からの報告
 - (7) 意見交換
 - (8) その他
 - (9) 閉会の挨拶
5. 配付資料
 - 6-1 経営顧問会議委員構成
 - 6-2 第 5 回経営顧問会議議事概要(案)
 - 6-3 第 5 回経営顧問会議におけるご意見への対応(案)
 - 6-4 日本原子力研究開発機構の茨城地区における研究開発の概要
 - 6-5-1 日本原子力研究開発機構における中性子利用研究の展開
 - 6-5-2 J-PARC 計画について

6. 議事概要

(機構業務について)

- 機構業務に関する説明において、予備知識がある方を対象にする場合には、高速増殖炉、核融合といった言葉が理解できるが、一般の人を対象とした説明ではもっと違った説明の仕方やストーリーが必要。例えば、量子ビームテクノロジーよりも物質・生命の探求、というような言葉使いの工夫が大事。
- 原子力機構の実施する研究開発を一般の人に魅力あるものとして理解して貰う工夫として、まず原子力機構のミッション・目的は何であるのかということを端的に表現し、それを実現するための要素技術開発を行うというような構造で説明することが考えられる。
- 長期的投資が必要なものについては、初期段階で一つに絞り込むことは危険である。例えば、高温ガス炉と FBR の研究開発は、将来の我が国のエネルギー安定供給のために、それぞれ必要であることの理解を得ることが必要。
- 原子力機構業務について国際的にはどのように評価されているのか。例えば、高温ガス炉開発でカザフスタンとの協力については、どのように評価されているか。また、海外から高く評価されるためにどのような手を打っているか。

(2100年原子力ビジョンについて)

- ロングスパンの研究開発は、先のことだから今決める必要はないということ議論が終わってしまうことが危惧される。これを今着手すべき現実の問題として、国民の間に議論を巻き起こすことができるかが大事。
- 原子力と他の電源の間の競争の中で、原子力の優位性、存在意義を示す必要がある。そのためには、長期ビジョンの中で新エネルギーの検討も必要ではないか。
- この計画を遂行するためには、何時までに何をやるのかという具体的計

画に落とし込めば、自ずと機構が必要とするお金が見えてくるはず。これを研究のマスタービジョンにまでつなげていくことを望む。

- 世界の科学者のコンセンサスが得られている IPCC（気候変動に関する政府間パネル気候変動に関する政府間パネル）との比較、2080年に宇宙太陽光発電と核融合が実用化した場合の原子力の中継ぎとしての位置づけ、他の発電システムとのバランスも考えて評価すべきである。

また、我が国の原子力発電割合 60%の妥当性についても検討してほしい。

- 2100年ビジョンについては、世界の中で日本がどうあるべきかなど、日本だけではなく世界を視野に入れた提言を期待する。また、夢のあるものになるように、宇宙太陽光などの新エネルギーも視野に入れた補強も期待。

(J-PARC について)

- J-PARC の国際共同利用については、わが国の知的財産であることを踏まえて、国策として海外の利用が意味のあることを一般国民が理解できるような説明が必要。
- 利用促進のためのマネジメントについては、外部から経営ノウハウを入れていくことも必要。
- 利用者には、安全教育を受けていない者、外国人、ハンディキャップを持つ研究者などがあり、全ての利用者が安全に利用できる施設になっていることをチェックすることが必要。

以 上